
世界は愚かし正せよ祖国!!

しろめのくろねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界は愚かし正せよ祖国！！

【Nコード】

N6391K

【作者名】

しろめのくろねこ

【あらすじ】

黒髪^{いさん}の乙男（お菊さま）と彼女（彼？）に想いを寄せる一途な先輩^{アーサー}が各国のくせ者めらと夜の酒通りで繰り広げるへんてこファンタジー

プロローグ（前書き）

ヘタリア×夜は短し歩けよ乙女のまさかすぎるパロディ

書き上げられるかは不安ですがぼちぼちがんばりたいと思います。
うわゝ前途多難！！

それでは召し上がれ

ブログ

これは非常に遺憾ながら俺の話ではなくあいつの話であることを最初に語らなくちゃいけない

世界の指導権を握ろう、他の国より目立とうと各国が小狡く遁走するなかでまったく意図しないうちにあいつはこの世界のヒロインだった

そのことにあいつは気づかなかった

きつと今でも気づいていまい

これはあいつが夜の旅路を、

なんというか持ち前の天然さと真面目さと……か、可愛さと（小声）こほん、えーつとまあその他いろいろを駆使して歩き抜いた記録であり、悔しいことに主役になれなかった俺の記録でもある

諸君には肩の力を抜いてこの二人の茶葉を入れすぎたアールグレイの味に似た人生の珍味…（苦そうだなあ、おい）を心ゆくまで味わってください

願わくばあいつに、や、やっぱ俺にも声援を。

マルノイチ

「おともだちキッス」を皆さんはご存知でしょうか

あ、いいえ！！勘違いしないでほしいのですがこれは私が考案したのではありませんよ？

例えば身近な国の破廉恥窮まりない行動に腹が立ち、やむおえず鉄拳をお見舞いしなければならぬ時ってありますよね

え？ない？ふうむ。文化の違いでしょうか。私はしょっちゅうですよ

しかし、そんな時に殴るなんていけません

なんてったって目だってしまいますし、国際間の関係が崩れ恐ろしいものになってしまうかもしれません

しかしここでいったんそのこぶしを下ろし深呼吸をして怒りを心の奥に押し込め、相手の国の耳にせ、接吻をするのです

「鉄拳を堪えて、悔しさに顔を歪めつつも耳元にキスをする、うん、やっぱお兄さんは恋のキューピッドの生まれ変わりだなあ」

幼いころ、私に、歳のはなれた兄の愛の戦士（個人的には美少女戦士じゃないのが大変残念である）が伝授したこの技

愛の戦士…このさいばらしてしまえばフランスさんなのですが秘密ですよ？は次のように語りました

「いいかい。島国であり、きゅーと極まりない菊はのべつまくなしに他の国にねらわれるけど、鉄拳なんてNonNon。美しくない。腐れ外道やどあほ達をあしらうときにはお兄さんの教えた『おともだちキッス』を使うんだ。おともだちキッスには、『あなたはあくまでお友達でいたい』という日本的な控えめな拒絶の意味があるから。おともだちキッスを駆使して国々をあしらってこそ、美しく世界を渡り歩けるんだよ」

愛の…フランス兄さんはそういつてウインクしました

私は理解しかねましたが、フランス兄さんがあまりにも使え使えとしつこく言い寄ってくるので少し頭にきました

はっ、もしかここでおともだちキッスを使えばいいのでしょうか

…勇気がいりますが、これで効かなかったらそれを理由に「ほら効かないじゃないですか」といえばいいのです!!

「フランス兄さんっ」

「ん？なんだいやつとわかって…」

ちゅっ

私は思い切り背伸びしてフランス兄さんの耳たぶに軽く接吻をしました

「ふ、フランス兄さんは、あくまで、お、お友達ですよ!!」

フランス兄さんはきょとんとしてから口をぱくぱくとさせ、少し頬を上気しています

私はフランス兄さんが静かになったのを見て、これは意外と効果があるのかなと見直した

フランス兄さんは頭をかいて両手をあげ、「まいりました」と言った

小さな声でフランス兄さんが「こりゃ、えらい必殺技伝授しちゃったかもなあ」と言ったのは上機嫌な私には聞こえていなかった

私はこうした訳故に、おともだちキッスという奥の手をもつ。

マルノニ（前書き）

今更ですけど今までの登場人物の名前を一応。

先輩 アーサーさん

黒髪の乙女 菊さま

赤川先輩 スイスさん

東堂奈緒子 リヒテン

東堂さん にーに

乙女のおねえさま フランス兄ちゃん

これから登場予定

羽貫さん エリザ姉様

樋口さん プロイセン

李白 イヴァン

その他配役は気分次第です（笑

お邪魔しました。

では続きを召し上げれ

マルノ二

近隣の国であるスイス先輩が結婚することになり祝賀会が催された

俺は特にスイス先輩と親しいわけじゃなかったけど上司が行けとうるさいから顔をだした

そこにはあいつの姿もあつた

黒髪の乙男、菊の姿が。

会場は川辺にあり、落ち着いた雰囲気彩るうす橙色の色彩の雪洞が温かく、暖かく…

あっちーなあちきしょー！！

契りを交わしたばかりの新郎新婦（そうそう。新婦はリヒテンシュタインさんというそうだ）は神を畏れぬ熱々っぷりで参加者を丸焦げにしていた

「にいさま、わたくしなんかと結婚されてほんとによかったのをございますか？」

良くきや結婚してねーだろ

「なにをいつているのだ？我輩には他の女など視界にすらはいるにたらん、リヒテン、お前さえいればな」

あほらし。眼鏡買ったほうがいいぞ？

「にいさま」「リヒテン」

「ああにいさまっ!!」

「おおりヒテン!!」

それをお姫様抱っこでぐるぐると廻りながらやっている

おっ、だれか俺をみる

今なら笑顔で青筋を浮かべられそうだぞ

けっ、いちゃつきやがってとこの場にふさわしくないとしりながら舌打ちをする。

もういい。

俺には楽しみがあるからな

テーブルの隅のあいつの姿を眺める

あいつはさつきから何が楽しいのかよくわからんが皿の隅にある蝸牛のからを興味津々といった様子で眺めている

みてるこっちは、まあ楽しいからいいんだけどなっ

あいつはクラブの後輩で、はづかしながら一目惚れっつーんだよね
…をしてしまった

でも親しく話したことはなくて今日はチャンスだとおもっていたのに。

幹事「みんな、席順は連絡してあったと思うけど、幹事なオレが全部今日決めたからそれに従ってくれよ」

はあ？

俺はせっかくあいつの一つ離れた隣という超特等席（さ、最初から隣とかは…ちよっとむりだし！！）だったのに

余計なことしやがって！と再び腹が立って質のよいローストチキンをかじりながら幹事を睨む

幹事は当たり前のようにあいつの席の隣に座り

あろうことか俺をみてニヤリと笑った

だあーちつくしよお
アメリカ
いまにみてる幹事い

立ち上がるうとした瞬間

「それでは新郎新婦のご挨拶だぞ！みんな席に着いて。し、ず、か、に、聞くんだぞつ。いいね、特にアーサーくん」

会場からの失笑がもれ俺はなすすべなく席に座り直す

ちくしよーちくしよーちくしよー

どんな仕返しをしてやろうかと考えながらも俺はローストチキンをかじるしかなかった

マルノサン

料理店での祝賀会がお開きになり、参加者が散り散りに路上にあふれた

俺は血眼になってあいつの姿を探した

遠くから子供（シー君）と母親マシユーさんの

「まあ、あの人なんですか。変態ですよ」

「あわわ、しー、そんなこといっちゃ怒られちゃうよう」

という微笑ましすぎる会話に頬がぴくぴく引き攣るが、ええい、そんなの無視無視

散々人に蹴飛ばされたがやっとみつけた

しかしあいつは幹事アメリカに馬鹿丁寧アメリカに頭を下げているところだった

「えー、君はもう帰っちゃうのかいっ！！？」

「はい、すいません。新郎新婦に祝福の意をお伝えください」

「君がいない会になんの意味があるっていうんだ」

あほ幹事、おめーは幹事なんだから二次会も仕切るに決まってるんだろ

「あんな熱烈カップル、正直めんどくさいんだぞ」

いやいや、苦い顔をするなよ

おめーは幹事だろ（二回目）

あいつだってそんな事言われたって迷惑で…

って、笑ってるし

ちくしょー

俺は歯ぎしりが止まらない。

幹事は彼女の様子をみて調子にのっただらしい

「ねえ、オレと一緒に飲も」

そういつてあるうことがあいつの肩をだき、頬にキスしようとして
いるっ、はあっ？

あいつの絶体絶命のピンチ！

俺は溜まらず飛び出して幹事に体当たりを食らわそうと

食らわそうと

ジャキッ

「破廉恥です」

あいつはおっきな花の髪飾りを幹事の首元に当てる

それはピンの部分がケースを外すと鋭利な小刀になっていたようだ

なんだ…俺いらねーじゃん…

こぼれ落ちそうになる涙を拭い、あいつがこっちに気づいてしまったことに焦る

俺は出てきた手前引き返すこともできず

「や、偶然だなっ。こいつは俺が面倒みるから安心しろ？じゃ、じゃあなっ」

そそくさとあほ幹事を引つ張って逃げてきてしまった

幹事は涙ぐみ鼻水がでている

「アーサー、菊の目え見た？本気だったってあれ」「こら、台本にないことしゃべるなよ」「だって」

路地裏に隠れてあいつを見ると優雅な動作で髪飾りを着け直し、何もなかったかのように歩きだす

こっそりと追う

「アーサー」

こっそりと「ねえ、待ってくれよ」…て、うるせー

「ついてくんなよ」

お前の出番は終わった、と小声で怒鳴るがあほ幹事は聞きもしない

「オレ、惚れたわ。黒髪の乙男に」

「はぁ!!!? あいつは俺が」

「君うるさいよ。見失っちゃったじゃないか」

見回すとあいつの姿はもうなかった

掴みかけた好機は瞬く間に霧散した

「あ、アメリカアああ!!! てめえよくも!!!」

俺の罵声だけが路上に虚しく響いた

かくして俺は…

「おいおい、ヒーローなオレを忘れてるなんてひどいんだぞっ」

…お・れ・た・ちは早々と表舞台から退場し、あいつは夜の旅路を
辿りはじめる

ここからはあいつに語ってもらうしかないようだ
たのんだぞ、菊

マルノヨン

これは私が夜の酒場街を歩いた一晩限りのお話です

そもその始まりはスイスさんとリヒテンさんのご結婚の祝賀会にて余りのお二方の熱々っぷりに胸を焦がしなにげなく皿の隅に転がった蝸牛の殻をみていたら

急にどこからか声が聞こえてきました

「菊、おい愛しい菊」

私は辺りを見回しました

私の周りは知らない方ばかりでしたし、先程知り合った幹事さんは、偶然一緒になった私のクラブの先輩となにやら楽しげにつかみ合っています

「どちらさまですか」

「こつちこつち」

小声で尋ねるとあろうつことか蝸牛から声がする…気がする

ま、まさかぁ

「こつちだよー」

はしたないとは思いつつ指で拾い上げ、耳に近付けると

「俺だよ

…フランス兄さんだよ」

「ばかですかあなたは!!」

はっ、しまった

口にててしまいました、こほん

申し訳ない気持ちで、無言になった蝸牛の殻にすいませんと言おう
とすると

「…菊がばかって言ったの初めてかも、新鮮…」

忘れてました

フランス兄さんは生粋のDMでした。謝ろうとして損しました

「フランス兄さん、何故蝸牛からお声がするのですか」

「ふふ。お兄さんはね、菊の自慢の兄貴であり、愛の戦士であり、
そして極めつけに

…蝸牛の精霊なんだよ」

え〜と、ぎゃぐと流していいのでしょうか。微妙なラインです

…フランスお兄さんと、誰より自分のためにワン　ースの蝸牛型の
電話機を使って会話していると思ひ込むことにしました

「とにかくお兄さんは菊に伝えたい事があつたんだよ」

「なんでしょう」

「お酒のみたいよね」

「え？」

「お酒飲みたいんですよ」

「いや、今日は早く帰って溜まっている深夜アニメの録画を見ようかと…」

「お酒飲んでこなきゃ、お兄さん菊のピーーとかピーーを初恋のピーーさんに話しちゃうよ」

「お酒のみたいー!!」

「よし、近くに月面歩行っていうバーがあるから、そこがいいとおもう。てかそこに行ってくれ。でないとピーー…」

「だあああっ／＼／」

私は動転し、うっかり蝸牛の殻を落としてしまい、うっかり踏んでしまいました

ぎゃあああと悲鳴が聞こえ、そのあと、でもちよつと気持ちいかもーとも聞こえました

「あらいやですわー、ついっかかりー。いやいやほんと」

そしてすっかり悲鳴が聞こえなくなるまで何度も粉々になる程踏み潰し続けてしまいました

…私ったらっかかりさんっ

そして晴れやかな気持ちで二次会を幹事さんに辞退する旨を伝え二足歩行ロボットめいたステップを踏みながら月面歩行なるお店に向かいます

マルノゴ

私は太平洋の海水が三ツ矢サイダーであればよいと思うくらいに三ツ矢サイダーを愛しております

え？コーラはだめかって？

勿論。コーラなど邪道！！あんなものは黒い砂糖水です
ぽーいですよ、ぽーい。

三ツ矢サイダーのあの嘘偽りのない透明さにあなたはなぜ惹かれな
いというのです

こほん、失礼。

もちろん三ツ矢サイダーを瓶のまま朝の牛乳を飲むように腰に手を
あてて飲み干してもよいのですが…あの。無理なのです

何度も挑戦してはいるのですが半分までくると胃が『ちょ、おま、
ギブギブ！！ご老体なんだから胃を大切にしようぜ、な！！』と白
旗をふってしまうのです

ですので未熟者な私にはそのようなたいそれた夢は心の宝石箱にし
まって置くことが慎みというものとしています

そのかわりに私はカクテル（もう、フランス兄さんったらなんでバ
ーを指定したのでしょうか）を嗜もう…としましたが

「マスター…お水をもう一杯」

「お客さん、うちはお水屋さんじゃないんだぜ」

「かたじけない」

私は顔を真っ赤にして俯いた

フランス兄さん、話がちがいますよ!!

フランス兄さんの話ではこのバーは一杯のカクテルが300円と言っていたじゃないか

ちらり、と値段表を見ると

『カクテル15000円』

無理無理無理!!

先週DVDの限定Boxを買いあさってしまい今のお財布では…

かくして私は月面歩行にて無手勝流にお水を嗜んでいた（やけ水とでも呼びたい気分です）のですが、カウンターの傍にいた見知らぬ殿方に不意に声をかけられました

「ねえ君、なにか悩み事があるんじゃないか？そうアルね。」

その方は完全にやつちゃってました。お酒の飲み過ぎで目がぎらぎらしています

恐すぎです

「悩みがあるなら我に言いてみい、われい」

どこのヤクザですかー

うまくもない洒落を堂々といえる方にある意味で感服しました

その方は中国さんといいました

彼は大変酔っており、でへへと笑いながら近寄ってきましたが、中国さんからはつけられる香りは…酒くっさあ

この奥深いといえなくもない匂いは大人の香りなのでしょうが

大人の階段を上るのが嫌になった瞬間でした

「なにか奢ってやるアル」

「お願いします」

「…そこは乙男たるもの一回くらい断るものじゃないアルか」

「資本主義社会においてタダより安いものはありませんから」

カクテルを飲む私を中国さんは興味津々といった面持ちで見つめているのでした

「菊、似合いすぎアル、その格好。嫁にしたいアル」

しかも真顔で。

私は椅子からずり落ちた

「っ／＼酔いすぎですよ中国さん！！台本通りにお願いします」
（小声）

心配することねーアルとからからと笑う中国さん。
心配の塊ですよあなたは

「そうそう、菊、一人アル？連れとかいねーアルか」

「は、はい。一人です」

と私は汗を拭きながらいいました

マルノロク（前書き）

またまたお邪魔します

えーっと初めて読む方へ
私もそこまで深くはわからないのですが一応解説を

シナティ

日本のキティの海賊版

目、鼻、そしてなぜか口をもつ

ちなみに原作の夜乙では錦鯉ですがヘタリア番ということで

では、お邪魔しました
続きを召し上がれ

マルノロク

中国さんはシナティを育てて売る仕事をしているそうです

「ん、育てて？」

「中国では一つ一つ丁寧な手作業で育成アル。出稼ぎのおばちゃん達が汗水たらして…」

「あの、いいですもう」

リアルなんで。

「昔は札束で汗を拭けるほど儲かったアル」

中国さんは遠い目をした

「しかし、今思えば馬鹿馬鹿しいアル」

憎々しげにカウンターを拳で叩く中国さんの背中はいささか小さく見えました

とある街に千金を投じて彼が作り上げた『中国シナティ制作所（株）』があります

そこで中国さんはおばちゃんたちと手に手を取り著しい成長を遂げていったのですが今年になって続け様に厄介事に見舞われました

ネット上で大掛かりな『パクリだろ、あれ』というガセネタ（本人

談）がながれるわ

おばちゃんの一人が『コンナセイカツトハオサラバヨ』といって
工事資金を持ち去って行方をくらませるわ

シナティの中に経費削減のために綿でなくとうもろこしのヒゲを使
用していたのがばれ（ちょ、本気でしょーもないですねっ！！）返
品の嵐になるわ

「えーっと、災難なんでしょうけど何故そんなにコメディー…」

「人の不幸を笑うなアル！！」

「恐れ入ります…ふっ」

「せせら笑うなアル！！」

手足をばたつかせている様子は微笑ましさを感ずる

「それで終わりじゃないアル。これ以上は何もないと思っていたら
あれアルよ。あれにはさすがの我も思わず笑ったアル」

先日の夕刻、その街に竜巻が発生したそうです

その竜巻は勢力が衰えることもなく、あろうことがまっすぐにシナ
ティ制作所へと入っていきではありませんか

パニックで『ホンモノノキテ ノロイダー！！』と叫ぶおばちゃん
の群れに踏まれながらも中国さんは竜巻に立ち向かっていきました

西側からの強烈な夕日が辺りを照らすなか、中国さんの最愛のシナティ達がニヒルな微笑みをうかべながら立派なキテ になって帰ってくるよーとでも言うかのように夕空へ飛びたっていきました

「孫・シナティを返すアル！！」

「王・シナティを返すアル！！」

と一つ一つの名前をさげんだ（まてまて、いくつあるんですかそれ）のですが竜巻は可愛…もといニヒルなシナティ達を残らず吸い上げてしまったのです

「いやゝなんかもうご愁傷です…ふふっ」

「可哀相なものを見る目でみんなアルー！！」

その厄災のために中国さんは借金を返すみこみが無くなり、次なる一手を暗中模索だそうです

「孫・シナティを返すアル。王・シナティを返すアル。…いや返さなくて良いから現金で返せアル」

「中国さんは自分に正直ですね」

私としては若干皮肉だったのですが中国さんはプラスの面でとってくれたようです

「うう。優しい言葉をかけてくれるのはお前だけアル。4000年も生きてると審美眼はおのずから鍛え上げられるものアル。お前のような嫁をもてた我は幸せものアル」

いやまてまていつ嫁になったのですかっ！！

「我たちの幸せな未来に乾杯」

「…はあ。」

タダ酒を飲まして頂いている身、これぐらい我慢です

「それにしてもよく飲むアルな。そんなペースで大丈夫アルか？」

「ええ。お残しは許しまへんでえ、という日本の美意識がそうさせるのです」

「わけわからんアル」

中国さん苦笑いをしてから、ずっと真面目な顔つきになった

「なら好都合。もっと美味しい酒を飲める店を教えるアル」

お酒が入って熱い手で私の手を引いて立ち上がらせました

「ちよつと店を変えるアル」

マルノナナ

私達は川沿いを二人で北へ向かっていました

中国さんは大きなカゴを背中にしょっていらつしゃいましたが中身を聞いても「気になるアルか、気になるアルか」とやたらにやにやと笑っているの、むっとして「いいですっ」と断ってしまった

辺りを眺めながら中国さんは秘密のお酒についての話をして下さいました

そのお酒は『ぼじょれぬぬんぼ』といいます

…名付け親でてこい。

中国さんはほろ酔いで少しよたよたとしながら話してくれました

「そもそもぼじょれぬぬんぼというのは中国の密林の奥深くで作られている密酒アル」

「えーっと、それはボジョレーヌーボとは」「違うアル。もしくはあつちが偽物ね」

ぐるるーと犬歯をむきだして反抗する彼に少し身を引く

「わかりました。それでぼじょれぬぬんぼは、どのようなお酒なのですか」

「よくぞ聞いてくれたアル。密林の奥深くで少林寺の最高僧だけが

製造方法を伝授されていくもので、とても手に入れるのが難しい神
秘の酒アル」

「ほうそれはそれは。」

私はほてった顔を川からの風で冷やしながらぼんやりとぼじょれぬ
ぬんばについて思いを巡らせる

密林…少林寺…

しかしいつのまにか

大量生産…シナティ…うーん、
すいません、臭さぷんぷんです

そんなお酒がこんな酒場にあるものなのでしょうが、なにより胡散
臭い。うむむ

「飲んでみたいものです」

偽造品を密輸入してる疑いもありますしねっ （パロ中であつても
許しませんよ、中国さん！）

中国さんは足元の小石をアチョツと言いながら蹴飛ばして、ふと気
づいたように振り返りました

「お前、イヴァンを知っているアルか？」

「イヴァンさん…ですか。存じませんね。」

中国さんは顔に多量の縦縞をこしらえて自分の肩を抱いて震えました

「あいつは恐ろしい奴アル」

なんでもイヴァンさんはこの辺では有名な人物で、底抜けにウオツ力を愛し、専用の送迎車を乗り回すオカネモチであるそうです

イヴァンさんは最近中国さんが借金を工面して頂く際に奨めたばじよれぬぬんぼを大変気に入り、気に入ったあまりに知り合う人々全員にそれを振る舞い大いに語らっているそうです

「聞いた限りでは好人なイメージですが」

「騙されちゃいけないアル。奴の恐ろしいことといったら言葉にできないほどある」

「そ、そうなのですか」

中国さんは目に涙を浮かべて騙されちゃダメアル、騙されちゃダメアルと私の肩をかくかくとゆらして…目をくわつと見開くと道路の隅に駆けていった

？

私がとてとと近づいてみると

おうええええっ

嘔吐していた

私は背中をさすりながらこの人は人選ミスだと核心しました

マルノハチ

中国さんが連れて行ってくれたのはがらくただらけの雑居ビルの最上階でした

扉をあける瞬間、私はこのまま拉致られてしまったらどうしようと本気で考えてしまうほどに陰気な空気あふれていました

中は拾ってきたような薄汚れた椅子やソファが乱雑に配置してありました

お客はめいめい好き勝手に自分の居場所をさがして腰をおろしています

「菊、こっちアル」

私は中国さんに勧められて焼酎を飲みました

「我たちの永遠の幸せに乾杯」

「もう勝手にしてください…」

それは照れアルね！！

中国さんはばしばしと背中を叩いてきます

私はタダ酒タダ酒タダ酒…と譚言の様に呟き、天災がすぎるのを待つことにきめました

30分後

「…でな、娘がひどいアル」

先程から中国さんが愚痴っているのは娘さんのお話です

離婚していらいまったく会っていないそうです。

なんと悲しい話でしょうか！！

「ええ、でもきつと娘さんも心の中ではあなたに会いたいとおもっていますとも」

「そうだといいアルが」

中国さんは拳でぐいつと目尻を拭きます

「我はな、いつも思っているアル」

「なにをですか」

「娘の幸せについて」

私は顔をあげました

中国さんは茶化すでもなく私をみて悲しそうに笑いました

「娘が幸せになれるなら、我はどんなことでもするアル」

あれ？

私は頬にを滑るなにかに気づき手をあてる

濡れた指先、泣いてる…？

俯いて中国さんから顔を背ける

頭がお酒のせいではわわわとしているからなのです

これは断じて、か、感動した…とかじゃ。

「菊？」

ほたほたと。

涙が二ツ膝におち、

「ああ、眠いですね！！ほら、あくびばかりでちゃって、あは、あははは」

「そ、そうアルかつ！なあんだびっくりさせんなアル」

あっははははは、と他の客人達が半径2mにいたところ
で二人は盛大にため息をついた

中国さんは気づかない振りをしてくれる方針のようだ

かたじけない、と残った涙のあとを拭きながら念じた

「中国さんにとっての幸せってなんですか」

ふと思いついたままに質問してみた。

「それはもちろん菊といっし」

「それ以外で」

つれない奴アルーと唇を尖らせる。それから一変しにこりと笑って、焼酎に口をつけた

「ここら辺うろついてるとき、いろんな奴らに出会うアル。やたらハンバーガーが好きな奴、パスタが頭につまってそうな脳天気な奴、起源がどうかうるさい奴もいたかな…みんな変な奴ばかりアル」

口汚くいうわりに中国さんはとっても楽しそうです

私もなんだかそういう風に出会えるのはいいな、と思いました

「4000年生きたアル。辛かった時もあつたし、ひもじいことも数え上げたらキリがないほど。本当に長い年月だったアル。でも、ここで今奴らとであって騒げるのは」

中国さんは私をまっすぐにみてはにかんだように

「悪くねえ気分アル」

と言った

「私もそう思っていますよ」

自然と微笑みがこぼれた

中国さんは眩しそうに私をみて頭を撫でてくれました

それからおもむろにしょっていたカゴから手の平サイズの金属を取り出し、私の手に握らせました

「君にお守りをあげるアル」

そつと開くとそれは先端が凹凸になって、持ち手が平たく丸つぱい……まあつまるところ

「鍵、ですか」

「我の家の鍵アル。寂しい夜にはいつでも我の胸で泣きに來ていいネ」

「帰れ!!」

私が真っ赤になって鍵を中国さんの顔面に投げつけたのは言うまでもないことです

マルノキュウ

「シナティはいまに本家を抜いて世界中の人気者になるに決まっているある。そもそもシナティの起源は古く……」

中国さんはシナティの起源について語る合間に私の手を取り、「いい手アル」「可愛い手アル」と撫でます

私の手などどこが可愛いのでしょうか。ただ他の方に比べると小さくて色が白いだけで。

私のよりゴム手袋を撫でていたほうが断然艶やかで愛おしいに決まっています

「ああ、酔ったアル。菊もえらく飲んでるアルね」

「大丈夫ですか（…そんなんじゃない明日からハローワークに取り合っていただけじゃない！）」

私の心中の黒発言に気付かない中国さんは子供のように屈託なく笑った

「楽しく笑って飲む酒は二日酔いにはならないアル。いま我は幸せアル」

そういつて中国さんは腕を私の身体に回して抱きました

「元気だせ、若者よ……」

「はい、私は元気ですよ」

・・・「中国さんのターン」・・・

… 中国さんはにやけた

（きたきたきたーアルー!!）

うしししと酔いも手伝い正直お友達になりたくない笑い方である
が喜びの絶頂にいる彼は気付かない
なぜなら…

（ついに菊にぼでいーたっちのシーンアルー!!）

説明しよう!! 台本ではこのあと菊のドレスにうっかり手が入って
しまいすっかり胸を触ってしまうという中国さんにとって、待ちに
待ったおいしいシーンなのである、説明終わり。

（菊も顔が真っ赤アルー!! 意識してるのがバレバレ。可愛いすぎる
アルー!! うしし）

中国さんは変態… もとい、役に成り切ろうと舌なめずりをした

・・・「菊のターン」・・・

あのシーンですか…

私はとても冷や汗をかいていた

劇中とはいえ、と、殿方に胸を触らせるなど破廉恥です

ここは絶えなければ… うーでもでもでもー／／／

「菊、いくアルよ」

中国さんが小声で合図する

…てかなんでそんなに嬉しそうなんですか貴方は！！

私は頭から多量の湯気が出ていることを知りながらも

小さく「はい」と答えた

ぺたぺた

「日本、オマエ胸なーんにもないんだぜー」

啞然

「かぁ…かんこくうつつう…！」

「え？オレなんか悪いことしましたかアニキ…！」

スパコンっ

「ぐはぁ」

「韓国う、あんたは分かってない、分かってないわー！！！」

「え、エリザベータさん…？」

…いろんな事が起こりすぎましたが一応説明してみます。

えーと、中国さんが私のむ、胸を触ろうとした瞬間、韓国さんがどこから現れ胸をぺたぺたし、呆気に取られた私をよそに中国さんがキレかけ、さらに中国さんの10倍ぐらい憤慨したエリザベータさんがフライパンで韓国さんを殴った…といったところでしょうか。

なぜエリザベータさんが怒ったのかは私にはわかりませんが

いいシーンが！！菊の色気が台なし！！と言いながらエリザベータさんは韓国さんをタコ殴りです

死んじゃいます、鉄のフライパンは死んじゃいますって

「韓国め、そんなに乳が揉みたいなら私の乳を揉め」

「びぎー怖いんだぜー！！」

「帰れえ！！」

韓国はわーんと泣きながら酒場から逃走した。

いまのは…もう（笑）

中国さんは我に返ったように「今のはNGアル！もう一度やられるアル」

うるうると私をみて懇願する中国さん。私は優しく笑って

「えーと、まあ結果だけみれば同じなので、これでいいんじゃないですか」

中国さんを見捨てた

「菊うー…」

「さ、中国さんここで退場ですよ」

中国さんはふらつと立ち上がり

「ち…ちくしょおおおアル」

そして去っていく中国さん。

少し可哀相だったでしょうか

私がため息をつくときエリザベータさんが私の傍らに腰掛けました

「大丈夫？」

エリザベータさんの顔がずい、とアップになった。

凛々しくも清楚な花のようでまこと麗しい女性であり。

「ち、近いですエリザベータさん」

私は小声で牽制する

顔が熱い、やっぱり他の国のみなさんの距離感は苦手です

「きゃわい〜」

エリザベータさんは奇声をあげて私に頬刷りしました

私は汗りました

…この人、百パー劇中なこと忘れてるでしょ…

「ちょっとギルー！！あんたもこっちおいだよ」

エリザベータさんが背後を振り返ると色褪せた浴衣を着た男が悠然と立ち上がりました

「…俺様、忘れられたかと思っただぞ」

「ぎくー。忘れてなんかいないってば〜」

「今口で『ぎくー』っていったらどろ！？？エリザあ！！」

きやはははとなにがツボに入っただのか、エリザベータさんは大笑いする

少しお酒が入っていますね、全く誰が飲ませたのでしょうか！！

「よう」

浴衣姿の男　ギルベルトさんが今更感バリバリな挨拶をなさいました

「夜の街であつた胡散臭い人間には、決して油断すんじゃないぞ。ゆうまでもなくエリザはスキを見せるとな……!!」

かつくん

「おわっ」

「隙ありじゃー」

きやははとエリザベータさん再び一人で大爆笑

膝かつくんを見事にきめられ膝をつけたギルベルトさんは苦々しく親指を後ろに向け「こうなる」と言った

こうして私はエリザベータさんと樋口さん（二人ともキャラが濃すぎ？）というお二方と知り合った。

マルノジユウ

エリザベータさんは湯水のごとくビールを飲みました

「エリザベータさん、ちょっと飲み過ぎですよ……台詞覚えてるんでしょうね」

急に真顔になったエリザベータさんは私の肩をがしっとつかんで真剣な面持ちで言葉を発した

「むべろひー」

「!？」

「ふみみー」

「…」

「はっぷい」

異界語を嗜みだしたエリザベータさん。もう無敵。

けたけたと笑いながら私のドレスの上から太ももを連打しています

私は宇宙人の処理に困ってギルベルトさんに視線を当てると

ぎりぎり

は、歯ぎしりしてるー
怖っ

完璧に嫉妬ですかね

ギルベルトさんはエリザベータさんが大好きなようですから

目が据わってます

「ぎ、ギルベルトさんはなんのお仕事をなされてるんですか」

私は目を逸らせなくなつて頬を引き攣らせながら世間話

「俺様は英雄…」

「ばっかじゃーん」

エリザベータさんがギルベルトさんの英雄自慢を根本から…いえ、地球の表面から剥がす勢いで否定しました

「だってギルギルったらー。うひひ。ちっさいとき泣き虫だったしー」

「ばっ、それは昔の話だろー！おめーこそ男みてーな格好だった癖によお」

「いやん。私は永遠純度ひゃくぱーせんとな少女よう」

嘘くさ…と呟いたのはギルギル…もといギルベルトさん。

ギルギル…知られざる未知な過去になにがあったのでしょうか

「それより菊ー」

「なんですか。」

「私達がいてよかったわね。中国はろくな奴じゃないんだからね」

そういつて私の膝に頭を載せたままとろんとした目で口をとがらし恩を押し売りしてきました

場違いなので発言は自重しますが、今現在のエリザベータさん、大変かわいいです

「はい。でも申し訳ない気持ちもしてます」

「なんれー？」

精神年齢が一桁になってしまったエリザベータさん

こらこら膝上から私の耳たぶを引っ張るのをやめなさい
かわいいから！！

あとギルベルトさん、カウンター席からビールをストロー（極細）
で啜りながら私を無言で凝視するのをやめてください

…むせてるし（笑）

でもそんなに椅子を傾けたら

あつ

どさささ

「あつだあー」

「ばっかでーギルギル」

…不憫キャラ絶好調。

私はあまりの不憫さに平常心を取り戻すのであった

「中国さんは商売で失敗してしまったそうです…それなのに私ときたら冷たい仕打ちをしてしまいました」

エリザベータさんは顎に手を当てて（定位置化してる膝上で）
ギルベルトさんは起き上がりざまに真顔で

「「胸触られたかったの？」」

ハモった

しょーもない所で、もう！！

「違いますよっ」

「「またまたあゝ」」

だからなんでハモってるんですか。いらいらしますね

「あー。中国の奴、感極まって身投げでもしてなきゃいいけどな」

「そんなこと…そんなことしないもん。多分」

エリザベータさんはぬらりと立ち上がった

ギルベルトさんの浴衣の襟をしめあげる

「なんでそんな嫌なことゆーのよう」

「いや、なんとなくそう思っただけだ…」 「わたしにいじわるするなあー!!」

エリザベータさんはどこからかあのフライパン（韓国くんの頭の形がくつきりだぞっ）を取り出し、ばかーとギルベルトさんをなぐりつけた

ギルベルトさんは白目をむいて地面でぴくぴくしている

合掌。

私は不憫を通りこした存在に、不用意な発言は控えよというありがたい教訓を得ました

「菊ー。ギルなんかほつとこ。一緒に次のお店にいかない？」

私に拒否権はなかった

「…お供させて頂きます」

「ちょっとまってっ」

足首をがしつと捕まれた

「ギルベルトさん、ご無事でしたか」

「いいか菊。エリザに逆らってはいけない。彼女の命令は死んでも従うんだ、いいな」

「忠犬根性ですね、ギルベルトさん…感動いたしました。ですが…」

私はギルベルトさんの頭をヒールのかかとで抑えた

「ドレスの下を覗くことをないように、ね？」

「ギルさいてー」

「エリザベータさん？なんでギルベルトさんと同じアクションをしているのですか」

私は青筋をエリザベータさんにも向ける。カメラを構えてる…彼女のほづが悪質みたいだ

「エリザ！…おめーも菊のパンチヲ狙いか」

「ふん、あんと一緒にしないでよ」

そついうとエリザベータさんは起き上がるとつかつかと私の元にすつくと立った

私は防護線を張る

「エリザベータさんは盗撮なんてしませんよね。」

「当然よ。」

ばっ

正々堂々とめくられた

「……！！！！なあっ！？？」

「……はーふぱんつの三回折り、膝上20？と見た！！！」

「ぶはっ」

鼻血をふくギルベルトさん

「え、エリザベータさああん」

エリザベータさんは颯爽と髪を払い「なあに？」と無邪気に笑ったのであった

マルノジュウイチ（前書き）

お久しぶりです

随分と間を開けてしまい申し訳ありませんでした

今回はエリギルがきてます

エリザは完璧な変態キャラになっていますが可愛がってあげてくださいな（笑）

では召し上げ

マルノジュウイチ

ビルの非常階段をエリザベータさんとギルベルトさんともでると初夏の風が私の鼻先を通り過ぎました

眼下にある小さな町並みはミニチュアに世界を凝縮したように雑然として、それでも言葉にできない秩序を保っていました

「そつえばなんで非常階段から出るんです?」

「うふふ。こつちのが秘密っぽくていいじゃないの」

ハイテンションで言い放ったわりに目を合わせようとしないエリザベータさん

「エリザつ、声がでかいぜ!! 静かに」

ギルベルトさんは慌てた様子でエリザベータさんの口をふさいでしきりに後ろを振り返っています

もしかして、もしかしますかね

「ギルベルトさん、もしかしてこれは食い逃「だー!」! あ、あれは、なんだろな」

すごい勢いで階段を駆け降りた

えーっと、道徳的にいかなものでしょうか…

私は遠い目で輝く星々を見上げ、”迷うこと勿れ”というお告げを聞いた（ことにした）

うんっ、私、もう迷わなーい

「きくうー早くしなさいよ。早くしないと下からハーパン覗くわよ」

先に駐輪場にたどり着いていたエリザベータさんが100万ドルの笑顔で変態発言をしました

「もう、エリザベータさんっはしたないですよ」

私はドレスの裾を押さえながら履き慣れないヒールをならして下におりていった

「おい、皆集合」

ギルベルトさんが顔に縦縞を付属させて私達を手招きしました

「菊、すまん語り部モード一時停止だ。…この物語の存続に関わる大問題が起きた」

事の重大さに私達はぐくりと唾をのみました

会場の皆様すいません、

少し語り部モードを休憩です

- - - - -

「語り部モードきました」

「どうしたってゆーのよう」

「エリザベータさん…首に抱き着かないで下さい。胸が」

「なに照れてんの。菊かわいいつ。むぎゅー」
べりっ

「ギルのばかあ、なんで剥がすのよう」

「ありがとうございますギルベルトさん（ちっ）」

「俺様、舌打ちは聞かなかったことにするぜ（泣）だから聞けつてば。重大なことなんだ」

「なん「なのよ」「ですか」「これをみてくれ」

「ズボンね。」

「ワイシャツですか。」

「ああ。それから上着と…残念なことに下着なんだ」

「…」

「…」

「…ぶはっ」

「エリザベータさんこれは大問題ですよ！！笑ってる場合では」

「あははははひいゝお腹いたいお腹いたい」

「自重してくださいよ…」

「ははははは、ふう…ふうー。そーいえばもともと台本だとどうな
つてたんだっけ」

「盗まれるのはズボンだけってことになってたはずだぜ」

「では、彼は今…」

「ああ…」

「まっぴに靴下ネクタイってことじゃないのー！！」

「エリザベータさんっ！！」

「きやははははマヌケよ。えろマヌケだわっ」

「自重しろエリザああああ」

- - - - - 10分後

「…やっと落ち着きましたね」

「つてか寝ただけだな」

「ふうー」

「苦労しますねギルベルトさんも」

「まったくだな」

「ふふ。でも…かわいいですね、エリザベータさん」

「あ?…あ…あ…菊がそーゆーならそーなのかもな…あ」

「顔が赤いですよ」

「うるせーや」

「それにしても…」

「ドンマイだな、あいつ」

「不憫なギルベルトさんより不憫な状況ですね、彼は今」

「終わったな、あいつ」

(二人で遠い目で満月を見上げる。二人の目には満月に彼が微笑んでみえている。靴下ネクタイまっぴで。)

「さ、まあ今はとりあえず忘れて物語を続けるしかねえな。真相を知るには」

「そうですね。では語り部モード再開しますのでしばしお待ちを」

- - - - -

帰ってきました、私、菊です

「むにゅ…」

エリザベータさんは今も私に寄り掛かったままで爆睡しています。
酒臭ささえも美女にはプラスにしかありません、ええ。

「どーするかこいつ」

ギルベルトさんはそわそわきよろきよろとしています

はて、どうしたのでしょうか

「起こしましょうか」

「いやっ！だめだっ！」

？

私がギルベルトさんを見ると頬をかきながら、”いや〜よく寝てる
じゃん、こいつ。起こすのも可哀相だなあって…”

…ははーん

「そうですね、私では少し力不足ですし。ギルベルトさんよろしければ運んでさしあげて頂けませんか」

ギルベルトさんは犬だったらしっぽがちぎれるのを心配するほど輝いた顔をしました

「しょー！しょーがねーなあ。重いから嫌なんだけだよ。ま、仕方ないよな俺様優しいしなー！」

はいはい、バレバレですよ

私はじじいが孫をみまもる目で嬉しそうにエリザベータさんを背負うギルベルトさんをみていました

「さあ、この塀をこえるぜ」

「塀を…？ギルベルトさん。あなたって人は食い逃げしただけでは飽きたらず不法侵入まで」

「ちげーよ」

ギルベルトさんはさすが鍛えているようで一人背負っていても軽々と2mはある塀を片手でのぼり、私に手を貸してくれた

私が塀の上に着くとそこには料亭の庭のような場所がありました

「綺麗な庭ですね」

「まあな。俺様達はここで次の酒を頂く予定になってる」

私が庭にある古風な雪洞や池に見取れていると、うーんと呟くような声がした

「…はへ」

「エリザ」

「ぎる？ねーぎるう、ぎるってば。ねーねー」

「な、なんだよ」

ギルベルトさんに背負われたまま、寝起きの甘い声で名前を連呼するエリザベータさん

…いいなあとか思ってますよ

でもやっぱりエリギル萌え。笑

「おねがいがあるの」

「は？お願い？」

お酒がばりばり残ってるエリザベータさんは舌足らずな口調でお願いをのぞむ

ちょっと、純愛モードですかっ

”キスして”とか言っちゃいますかっ！！わー見てていいんでしょ
うか、私はっ…

「あの下着、もらっていい？」

痛いほどの沈黙。

エリザベータさん、良い子はオネムの時間ですね。

しゅばっ

「うっ！！」

私の手刀がエリザベータさんの首筋にめり込みました

「…すまない、菊」

「ギルベルトさん。貴方は悪くありませんとも、ええ」

二人は曖昧に苦笑いし、揃ってため息をついたのでした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6391k/>

世界は愚かし正せよ祖国!!

2010年11月3日16時17分発行